

『日本のロータリーが本気になった日』

今年、台風や大雨の被害が少なくてほっとしました。ここ数年は毎年のように、台風や大雨さらに地震と災害が続いていました。災害大国日本です。そのたびに、クローズアップされたのがボランティアの存在です。スーパー・ボランティアの活躍は、NHKのドキュメントにもなっていました。頭が下がる思いです。

そのボランティア元年が平成7年の阪神淡路大震災だと言われています。実際に、皆さまも経験されて鮮明に覚えていることと思います。

戦争や大災害の被害のあとに、組織が一変することはよくあることです。戦後の日本がその典型です。

日本のロータリークラブも一緒です。

1920年(大正9年)に東京ロータリークラブが創立しました。もちろん日本で最初のロータリークラブです。当時の東京クラブの選考は極めて厳格で、超一流人である上に英語を話せる人という条件があり、立派な大実業家ばかりの集まりでした。しかしながら定款細則などに対する関心が薄く、出席率も悪かったためクラブの存続も危ぶまれる状態でした。ところが、1923年(大正12年)9月1日の関東大震災で大きな転機を迎えます。RIにも東京、横浜が壊滅したとの報が伝えられ、震災から3日後の9月4日にRIから以下の電文が届きました。

「RI及び全RCを代表して深甚なる同情の意を表します。なんでも手伝うことがあれば幸いです」そして当時のRI事務総長チェスレー・ペリーは直ちに25,000ドルの大金を義援金として東京クラブに送ってきたのです。これがきっかけとなって、シカゴRC、サンフランシスコRC、ニューヨークRCから4500ドルその他各国の503におよぶクラブから続々と義援金や救援物資が送られてきて、その額も89,000ドルに達しました。(現在の金額で140億円になるそうです)これを見て腰を抜かすほど驚いたのが米山氏をはじめ日本のロータリアンでした。今まで、ロータリーなど上流階級の社交クラブほどにしか考えていなかった日本のロータリアンが初めてロータリー運動のなんたるかを知り、これは大変な組織だということに気がついたのです。大震災から2か月後に東京クラブは標準定款を採用して、毎週1回の例会を開くことを決め、会員もよく出席するようになったのです。その後、東京RCは被災者保護として、東京孤児院に新築一棟を寄贈して、これをロータリー・ホームと名付けて、以降の修理も含めて東京クラブの奉仕事業としました。奇しくも、大震災によってロータリーの本質が理解されることになり、日本のロータリークラブが、本当の意味でのロータリークラブとして活動を始める事となったのです。

大震災のあった1923年は、ロータリーの奉仕理念を表す文書として現在まで受け継がれている決議23-34が採択された年でもあります。

関東大震災がこの決議が採択された直後だったという事で、日本のロータリークラブだけでなく逆に、RIや世界のクラブにも大きな影響を与えたのではないかと考えます。

